



和勢参宮名所圖會

附録
一下

JL 4
8526
8





ル 4
3526
8

所名

後丸をまの四路を村老は向ひ此一里斗は後丸の河あり其地を後丸の山嶺と
 名づく又後丸の池と名づく即其地を後丸の山嶺と名づく小烟雨霏々として夜
 を流し山後真池と名づく乃中らみ榛棘を拂ひ橋をお托て奥の
 谷三編みして揖して絶く村よりはく思ふよかの谷の幽邃人の棲
 ざる處はわが後丸の先其地歴のなかりん備後丸の谷と稱する
 なるんやと再び村老は向ひ溪のなかりん岩をあり或はこれを若の柵と
 名づく人々を標し宇治より来りて安んずるをまのりつと名づくは先
 と名づく定ぬ此より白洲の流を絶く一里をりつと名づくは後丸の
 とはつと名づく後丸にて幸舟よりまの急流は高きとして絶く其の
 遂に遠くつと名づくはつと名づくはつと名づくはつと名づくはつと名づく
 琵琶湖の下流の海老尾と名づくはつと名づくはつと名づくはつと名づく
 且後丸其下百歩斗大石あり突元として高サ十歩斗の系急云つとも
 かく但一空舟率の地ありつと名づくはつと名づくはつと名づくはつと名づく
 経て石らにわがゆりぬ此水路石らより入る岩居なりは後曾我村
 又抵里或は後丸の谷と名づくはつと名づくはつと名づくはつと名づく
 まのりつと名づくはつと名づくはつと名づくはつと名づくはつと名づく

余吾湖 大に二 伊香郡志津嶽の山にありて平惟茂橋け辺は後丸の
 里斗

昭和十六年一月十一日寄
 尼野貴英氏贈

附言。日本史より懐凡漢紙引多天武大友の條を布せり天智天皇
天武帝の位を讓らんとして附これを書きどして僧とあり書體に入る
去れりん帝大友の位を讓らんとして附これを書きどして僧とあり書體に入る
謀叛大友と云ひ終ひり國史日本紀の首の粗體せり此是氷泥
滑して順送の論果と云

貫之祠

小村山下の樹洞に在り
正光寺村に在り
貫之を讓るの官と云
此祠は貫之の集日受の中の内が貫之を讓るの
其は極小なり
此祠は貫之の集日受の中の内が貫之を讓るの
其は極小なり

此祠は貫之の集日受の中の内が貫之を讓るの
其は極小なり
此祠は貫之の集日受の中の内が貫之を讓るの
其は極小なり

貫之の中他言長谷雄の傳又別傳と書に和方を稱せらる貫之を初め入して和方の
延法中御書不承とありて後法依とあり此任漢く降系の紀仍一忠を
著と云と云依月記と云天武九年坐檢院又遷て率と云法中奉
して後法依則及んは内躬烟土生忠岑と云と云和方集を撰と書
之の序を撰と書と云これを稱と云和方集抄五巻と撰と後

所名

又勅を奉じて新撰和方集を撰と此時法依又任と書成る系は未進の
帝崩終小是又抄いと貫之の序を撰り此書不承の詞甚哀功之嘗て
紀傳圖と赴臣時藤通の序は先人のよく知れ不かり

黒主社

貫之の志の遺る所と云と云國城寺の地なり和方を撰と
仁和の初々天嘗會の和歌を載と云奉修後の時法湯の記とあり和方平帝
志賀又御幸の初々是又途と拜候して後法依を載と云山山水と撰と
て法依又入らば是又此の序と云と云より連綿と其子都堵年磨
より後法大友の字を改て大伴と云

心静石

貫之の志の遺る所と云と云心静石の遺る所と云と云
あるは曰古今の序は貫之の志の遺る所と云と云心静石の遺る所と云と云
とありこれ貫之の志の遺る所と云と云心静石の遺る所と云と云

志賀山中城跡

志賀山中城跡の遺る所と云と云信長の築不森三石可成是
を志賀山中城跡の遺る所と云と云信長の築不森三石可成是
抱へり

志賀山城

志賀山城の遺る所と云と云志賀山城の遺る所と云と云
志賀山城の遺る所と云と云志賀山城の遺る所と云と云

くろぬいの中ら
 黒主祠
 貫之祠



まゝい ちやいのり
 黒主の大夫皇子より
 連綿して長等山の地皇と
 よむ祠にておふれりあり
 高野原の人の此廟はのちと
 一寺あり一人の孫あり
 源号ともをいふる風流
 一寺の境あり其をいふ
 祠の其をいふ

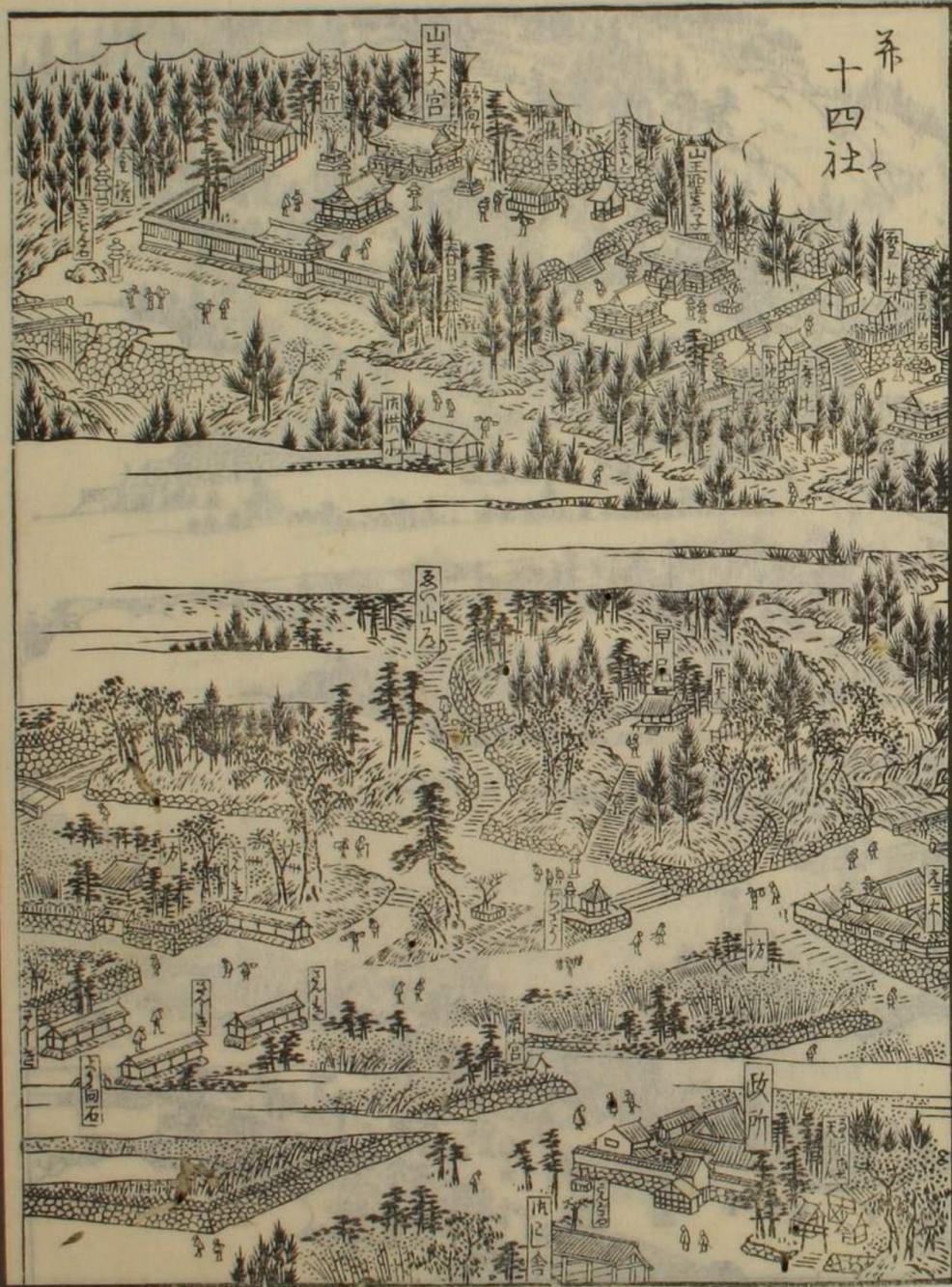


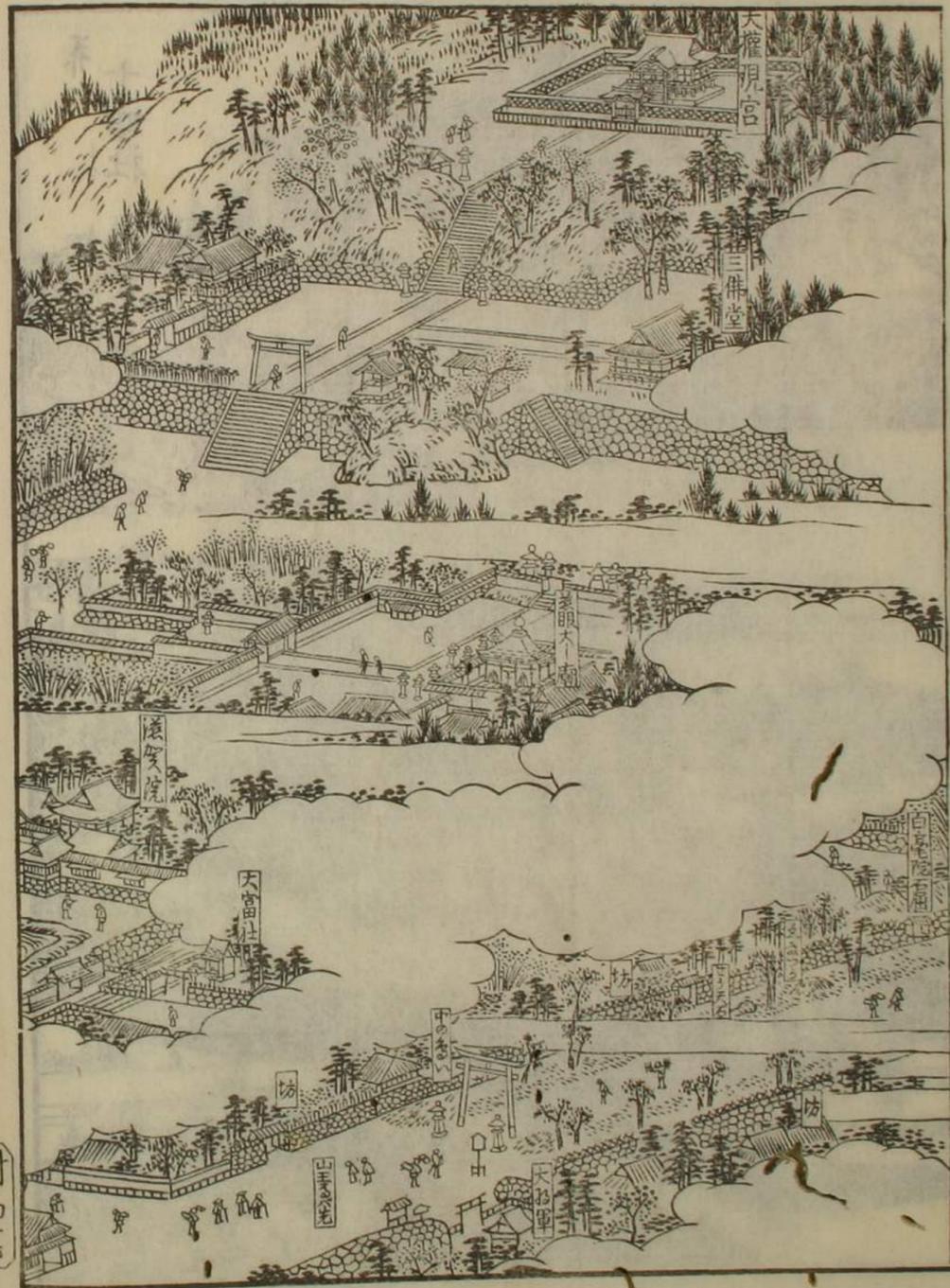
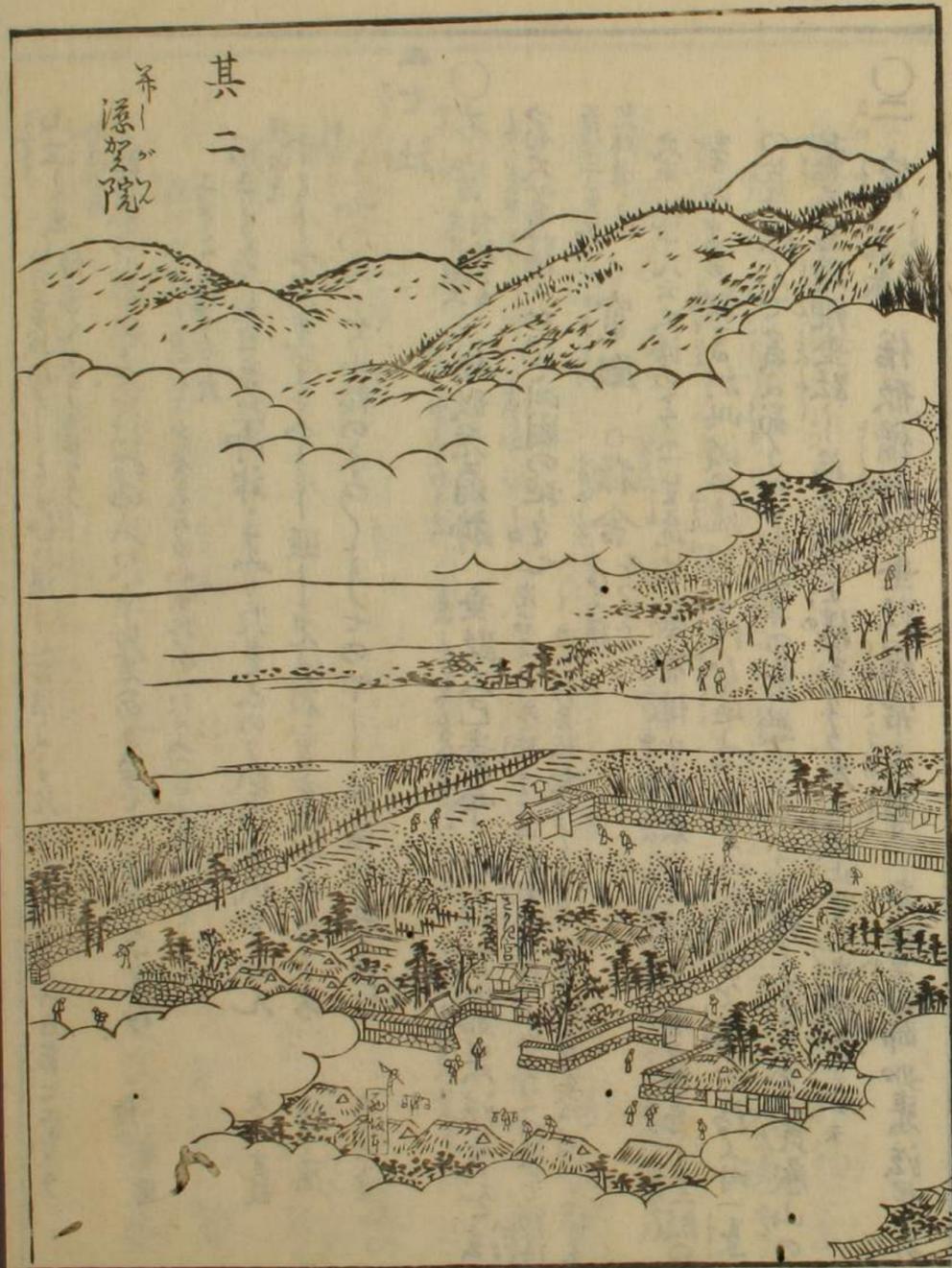
人かありたるを本の下るもゆき成ふなるべし
此の畧より東に湖あり三井寺大津西に白川流中
西にと眺るの絶勝なり
拾遺集
橋をたるとぬとらむなりいり人き志かえれ
此の集志文のふれは一井のりぬき多るる
むとてれとていふは人の井乃ほそも人
捧ろるれと辺をこえれりるもさり
志加寺の舊跡
志加寺に村の方より西のり入
拾芥抄志加寺抄に号山宗後寺
天智天皇の建立めく後三井寺
これ之閑山教侍のゆり三井寺の
穴六
此地都の流に後軍部坊あり
穴大舊都
景終天皇
仲哀天皇
三代皇居の地
是と高穴穂の宮と云三代の
今りての穴六はゆき成ふなるべし
仲哀の教かえりてゆき成ふなるべし
万松院旧跡
三好又教内をせむられ
中將

貫之
全

御津所あり此不要堂の地
堀城築は其御津邊
新坊と御興をあらはれ
いへ豊せらる依之
をも万松院と云とぞ
穴六記
日くはゆり神に志加をさけく
真葛原
我意の松をさく
上坂中
元真如堂
十王堂
明智寺
大権現御廟

御津所あり此不要堂の地
堀城築は其御津邊
新坊と御興をあらはれ
いへ豊せらる依之
をも万松院と云とぞ
穴六記
日くはゆり神に志加をさけく
真葛原
我意の松をさく
上坂中
元真如堂
十王堂
明智寺
大権現御廟





山王（山王） ○日吉のひよりとよむに誤り之古流よりたれを工とつハ日吉とエカク
拾遺神典 住吉もスミノエカク

後三系流日吉の社も移春のなる小本にたれハハミカ抄かせし
わくよとちりくたれ

後拾遺 大武実政 後村土佐 衣笠内大臣

八乙女乃るそと珍のそとくう七のやー海宮居せり

七社

○大宮大比叡 俗形老翁神 垂跡大己貴命 本地釈伽如來法号を去

宿大菩薩のひて此國の地主 左右二竹を植う山王親向の竹と右ハ腰を執法

三月十二日 電殿 猿舎をつらぐ 大正記十八云大海のよと一生長生慈有佛生如來常住有象易と波の

の草深んで安ふ前々々此草の葉果一一つの爲し必是今の比叡山の

禁大宮権現垂跡 後波止土波是ちうた波止りて土波たり云

○二宮小比叡 俗形僧神 垂跡國常立尊 本地藥師如來法号

其臺菩薩 ○天地開闢天神第一に天地二義の神之有る二宮と云。此神

垂跡の所を横川へ約九の方の才腰より大岩之上右白明神神と云

一石に名を波母と云松原の右二宮林と云社の元龜の兵史は焼く

○聖真子 唐老僧形 垂跡武蔵吾勝尊 本地阿彌陀法号ハ

懺大菩薩 旧記云聖子の神其心は兩神志心中より出せと云又号。天武

天皇白鳳年中に教向ある宮の左右に橋を植る。傍に本地あり

八王子 僧形 垂跡國持去尊 本地多手觀音 宗神天皇即位

元年の禊座にして八百萬神大祖元氣の神小比叡の赤金の巖の

傍に八人の皇子を引率して天降ある云又八皇子と云 二の宮のられありて

○三宮 唐女形 垂跡惶根尊 一説天照を神の三女 本地清賢

菩薩 旧記云三女親向の右三宮の右日く八王子の峯と云

びく二社ともみ林藤と送拜あり

○客入宮 唐女形 垂照修持冊尊 本地十一面觀音 一説曰白山

妙理権現 桓武天皇即位延暦元年以生子の禁裏又天降也。旧記云

文德帝天安二年六月十八日迁宮 里人の三年八月七夜七夜御持 此宮なりと云。神樂の級牡丹輪捧

○雪竹の岩 官の傍 童子形 垂照續々持尊 本地地藏菩薩

○十禅師 若僧形 童子形 垂照續々持尊 本地地藏菩薩

○旧記云十者天七地三の教之師の國之禪のゆづる十者天子國と儀

るの者之 桓武天皇延暦二年正月十六日親向 三月廿四日廿五日新元祥講 神樂の級と兼なり

乙上七社 大宮 後後撰 右の路乃と申にらるる花のみちひをよとる者れり

二宮 新古今 やとらるる親を掃きし墨をきりて花をよとる

聖堂子 後古今 庭りらるる光りる庭をせりし西の雲丹杖の庭乃月

客神 全 庭りらるる光りる庭をせりし西の雲丹杖の庭乃月

十禅師 後後撰 本の本れ渡りて光りる庭をせりし西の雲丹杖の庭乃月

撰属十四社

○下八王子 垂照天中尊 本地虚空蔵 本地石船と云石あり

○王子宮 十禅師神殿の傍に在 垂照建御名方神 本地文殊

○早尾 垂照素盞烏尊 一説後田彦 本地名物 旧記曰馬場頂上

○大紗目 垂照高皇産靈尊 本地思沙門天 舊記曰天照神素盞烏の神を

○聖女 下照姫を尊る 本地如來論觀音 延喜年中造立一尊女子乃

○新約事 瀛海姫を尊る 本地吉祥天女 旧記曰天照神素盞烏の神を

○山末 本地摩利支天 垂照未詳

○牛尊 八王子の社にあり 本地文威徳 傳曰牽牛星成なる

○小禅師 垂照後出く出見尊 本地孫勒龍樹

○惡王子 童子も出現して本地愛深明又深秘ありと云
 ○岩瀧 縮輔姫命 本地希文天。日記云竹生瀧の神の日替 又神武
 天皇の所へもついで

○劔宮 素戔嗚鳥の愛神 本地不動。日記云素戔嗚鳥出現之殿の凶の退教神
 ○瓦比 聖子か地事のむくひあり 仲夜帝をなめる 本地聖観音
 日記云素戔嗚鳥か神白。桓武の御宇勅法

○大竈 大宮の右にあり 海津彦命 本地金剛界大日。日記云大竈の
 神のまにに諸家竈の守神

▲末社 ○若宮殿 和野町比叡にあり。國常三三の本地金剛界大日也
 三社の竈殿に對してこれを聖三三の竈殿と云ふ
 ○女別當社 神さねあり不
 日記曰此社十三丁中子かて燈と
 山門をうへと後之形石のあり八丁にありの
 ありて比叡ふのり。佛苑の燈籠を嚙破るるるをせと防ぐは御方にて
 松臺と二社の神と出でて其怨ま瓜まつりうとらふ龍の虎倉と云ふ
 ○尾地宮 傳り
 天祥のちあり

○鼠壳倉 日記曰此社十三丁中子かて燈と
 山門をうへと後之形石のあり八丁にありの
 ありて比叡ふのり。佛苑の燈籠を嚙破るるるをせと防ぐは御方にて
 松臺と二社の神と出でて其怨ま瓜まつりうとらふ龍の虎倉と云ふ

○氏之長者 天祥のちあり
 ○戒宮 天祥の
 ○籠河原 八王子三の宮の内
 ありこれ織女を

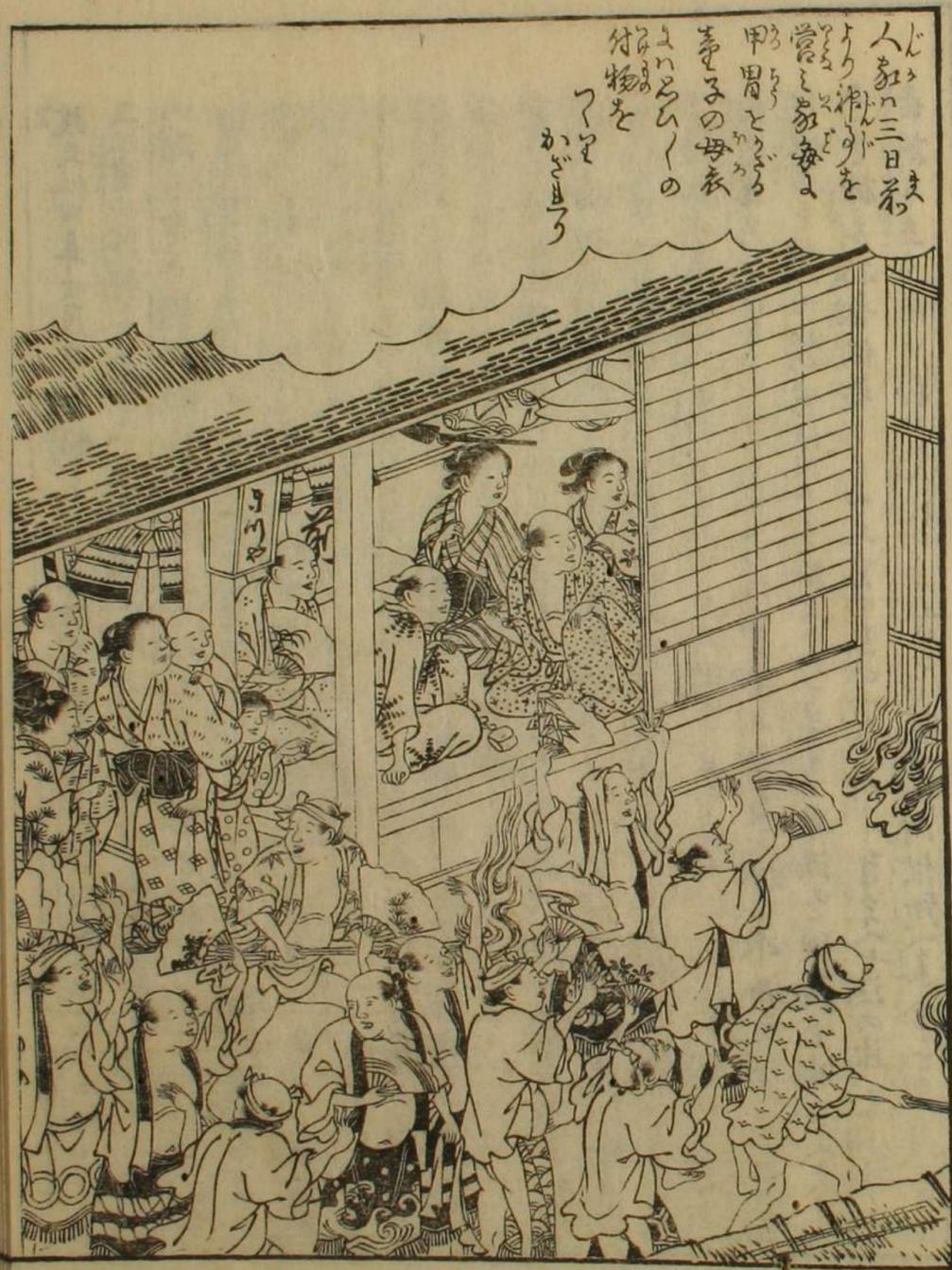
○夜掛石 此の
 ○地蔵寺 早尾に此の六角の寺
 傳教大師の傳あり

元三大師

元亨尺書曰良源姓は本津氏
 をいぬ沙舟耶の人之延保十二年
 九月三日出生と十二歳にて叡山
 堂り聖山と師と凡文をよみと
 たり康保三年八月天台の座を
 補せらる此師舎舎と
 天元元年僧正と名承親三
 年正月三日寂と年七十七
 良源石刀の自さうも勇
 徳より之れが自ら足成を
 て我を教と云せり依之云
 我像と云不必ず邪魅と除
 遣しと云世又元三師のれと云
 此像は二種あり一は角大脚と云
 是の形一は二つの之作の像
 のそ乃形かて小うて夏のかく
 ありの世三師と一は二師と云
 り之と後又皇太師と号たり







人あつ三日
 より御外を
 管とあま
 甲胃とあま
 子をの母衣
 よいあひくの
 付物を
 つて
 かごまう

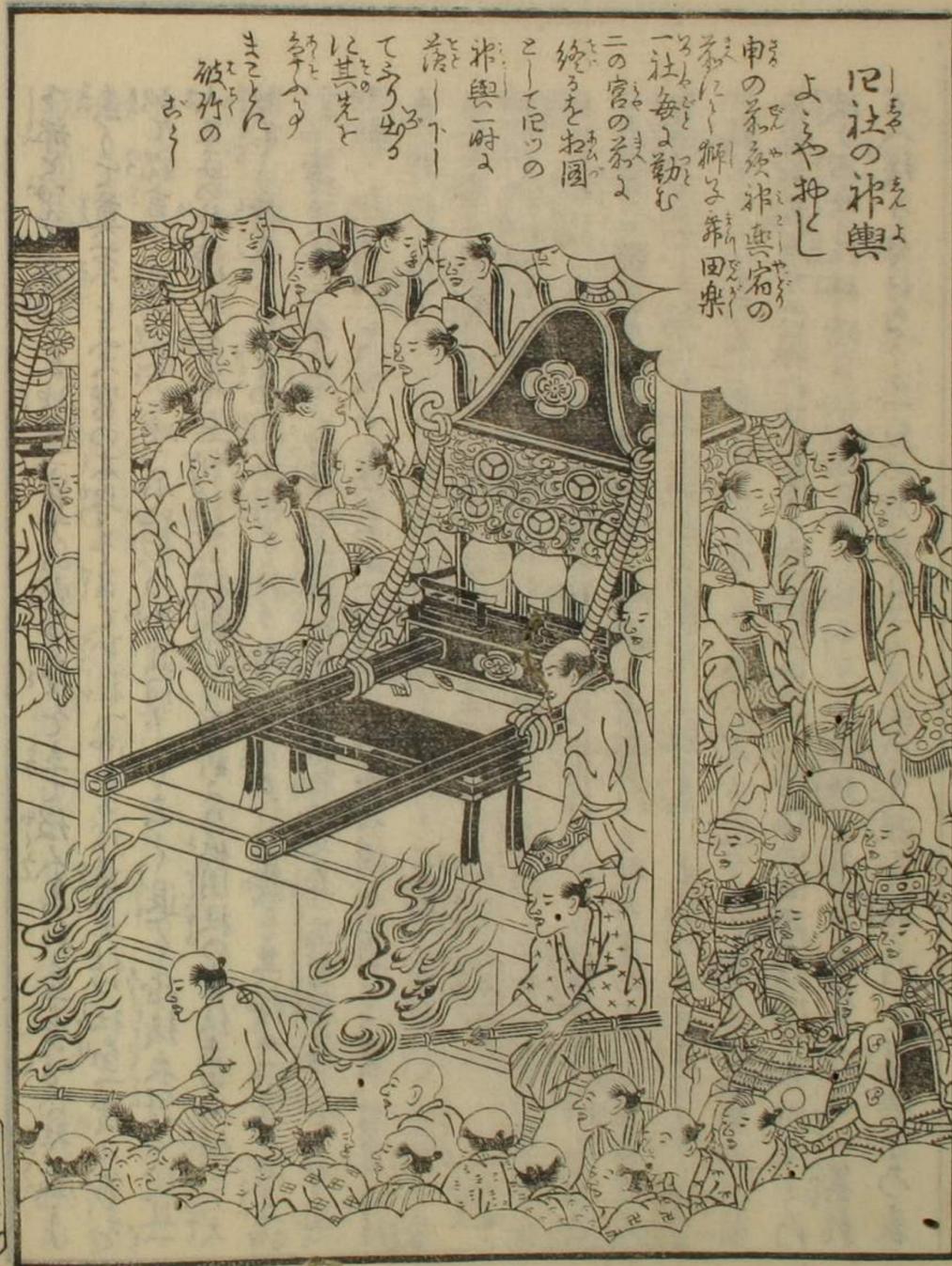
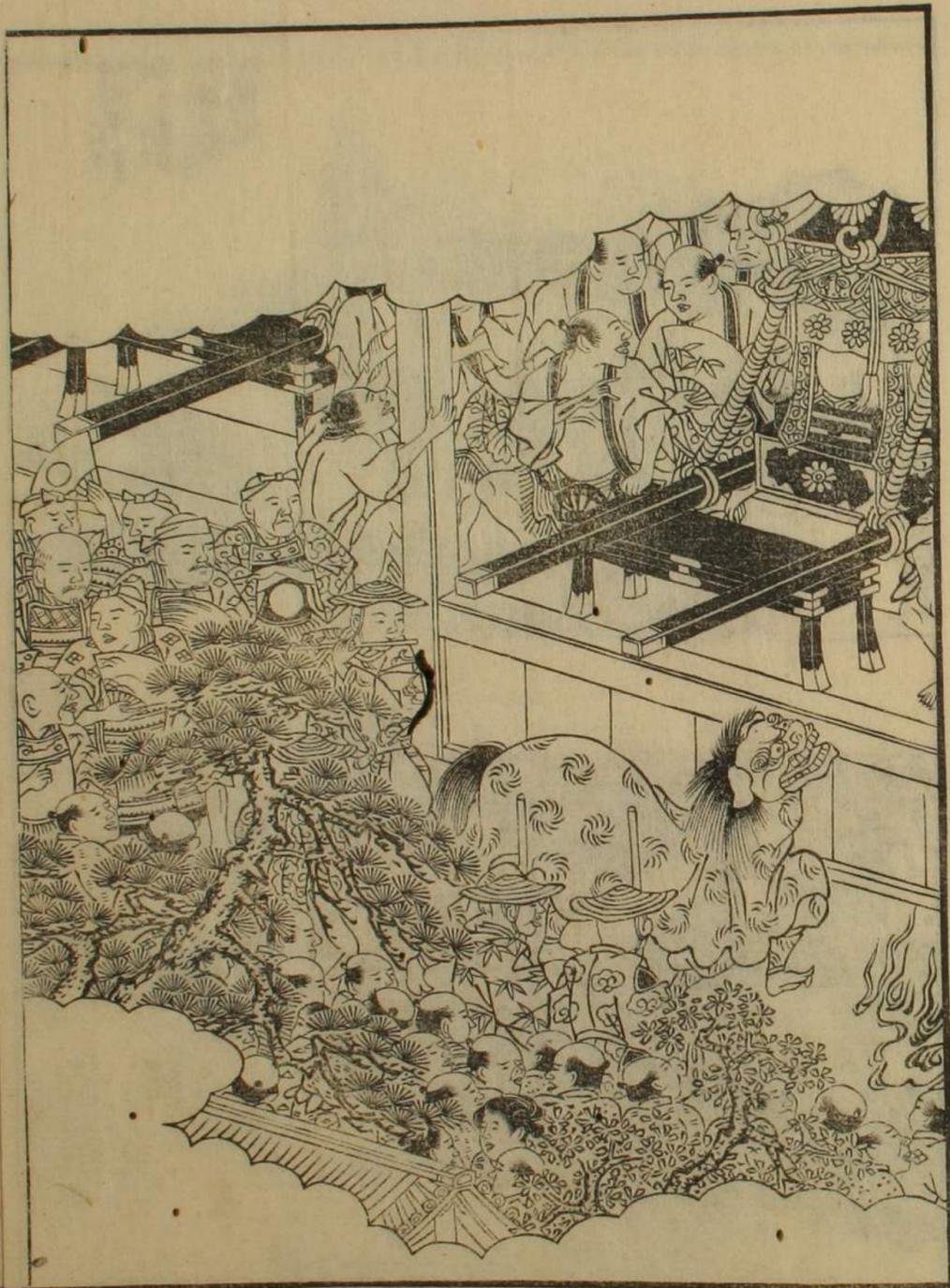


山王祭礼坂本町
 の駕輿丁
 南坂本町より出た
 若甲の日の赤帯
 人あつて
 松明を照し
 エイノラウの
 村中及び法橋
 をあつて
 姿いひた舞
 とあま
 2道地
 足せは角力
 足れ衣入
 何より上坂本
 下坂本乃

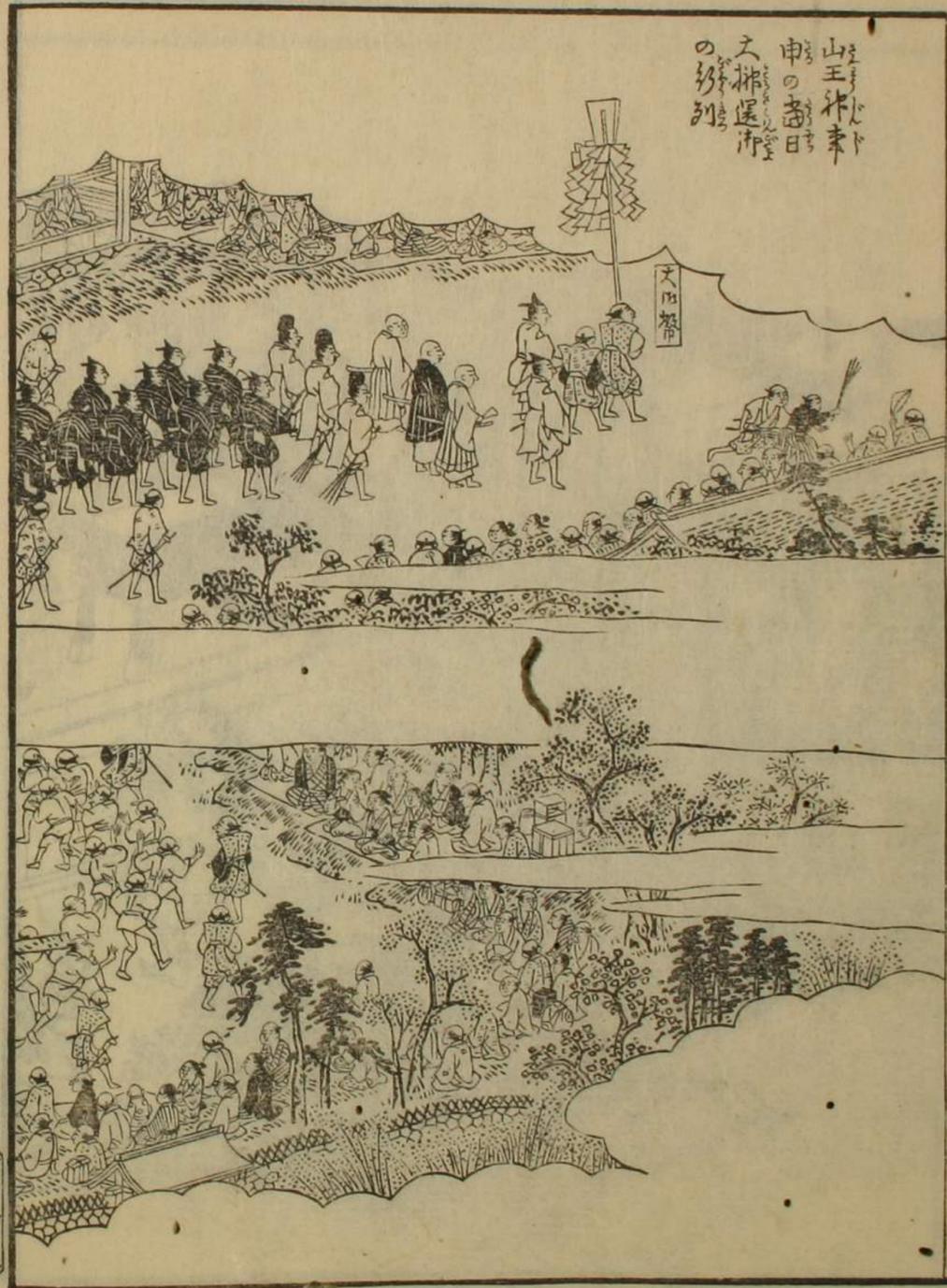
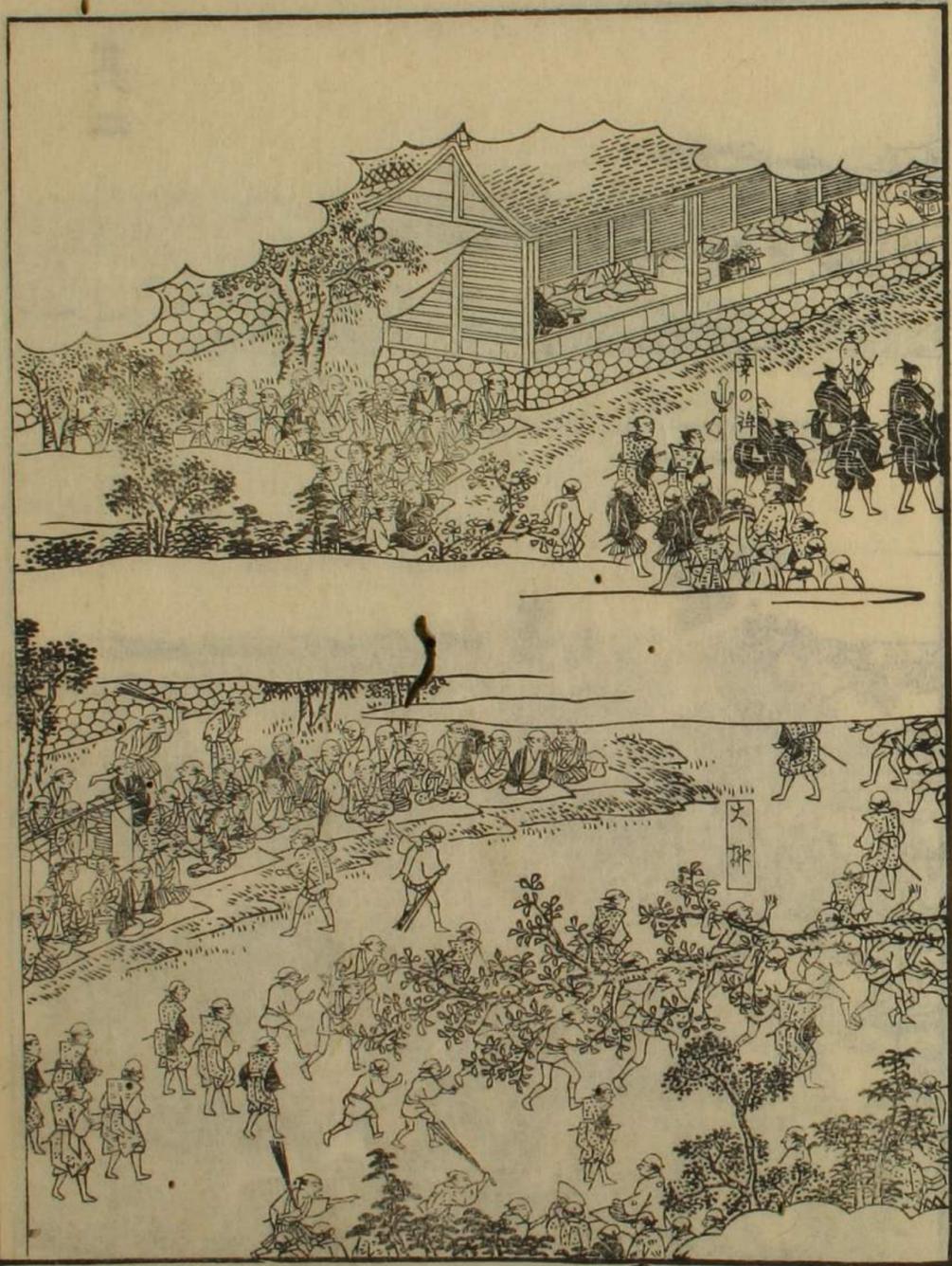
院天仁二年に月廿二日勅して十禅師の神輿を造らしむ。同永承二年卯月廿一日
又三宮の神輿を造らしむ。代圖融院天元二年卯神甚富津澤より幸され
の浦よりありて龍院齋首の如を造らし人二十余輩舞樂を奏し七十一代後三
條院延久二年卯月廿三日卯官幣役を造らし八十代明徳院建曆三年十一
月十八日祭礼の日勅使左近衛權中納言源宗朝臣致らるる是より勅使
終りて今日より神祇祭の始りて後光嚴院延久年中洪水已後の創り
終るる元龜の兵火よりして祭礼も久しくさへ事終りて天正の聖朝よりして神
殿祭礼とも相再興なりて今日連綿なり其祭礼は正月より始りて終り
みともを今たうまに於て作りて神祇の人の便とす

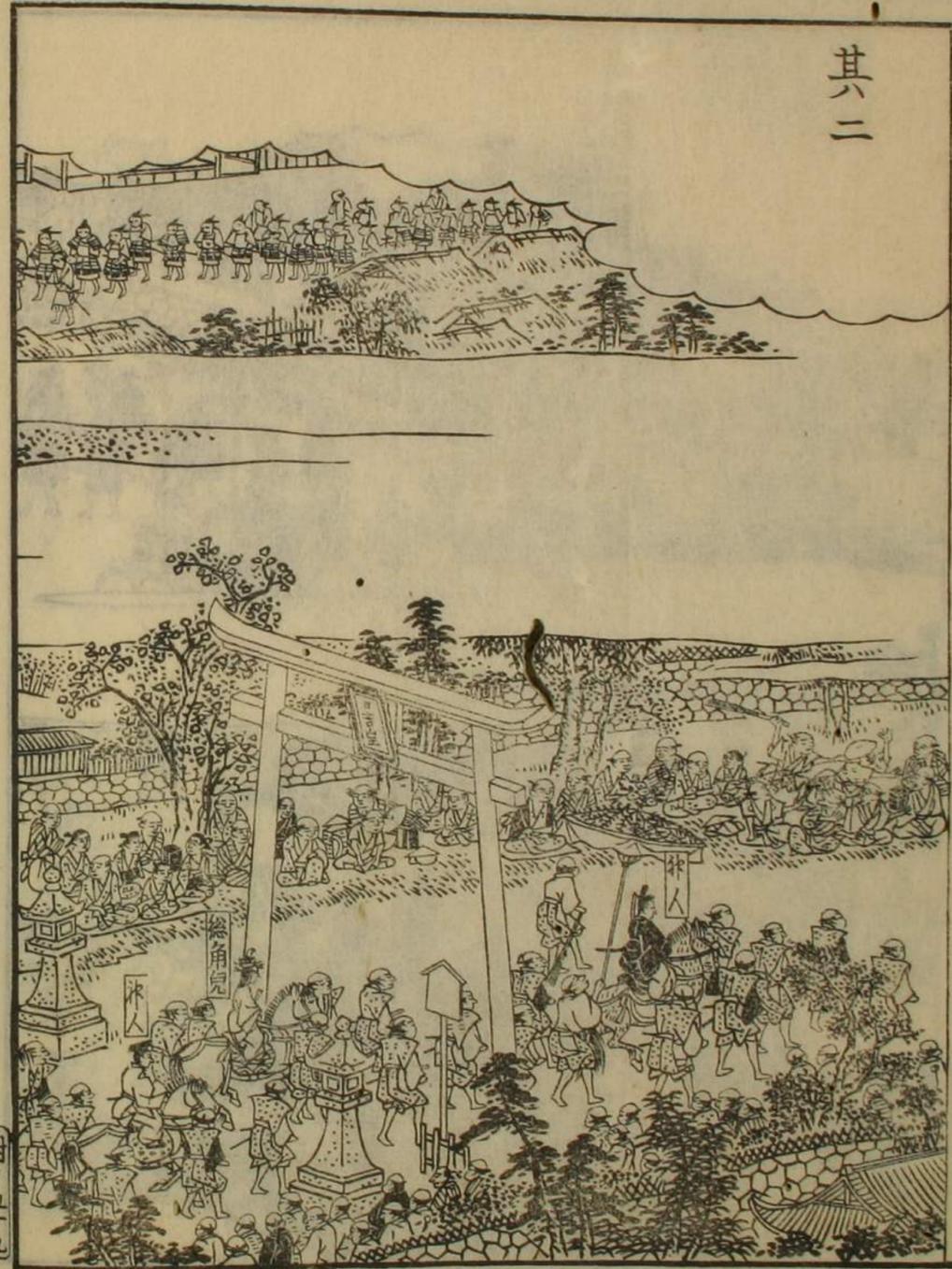
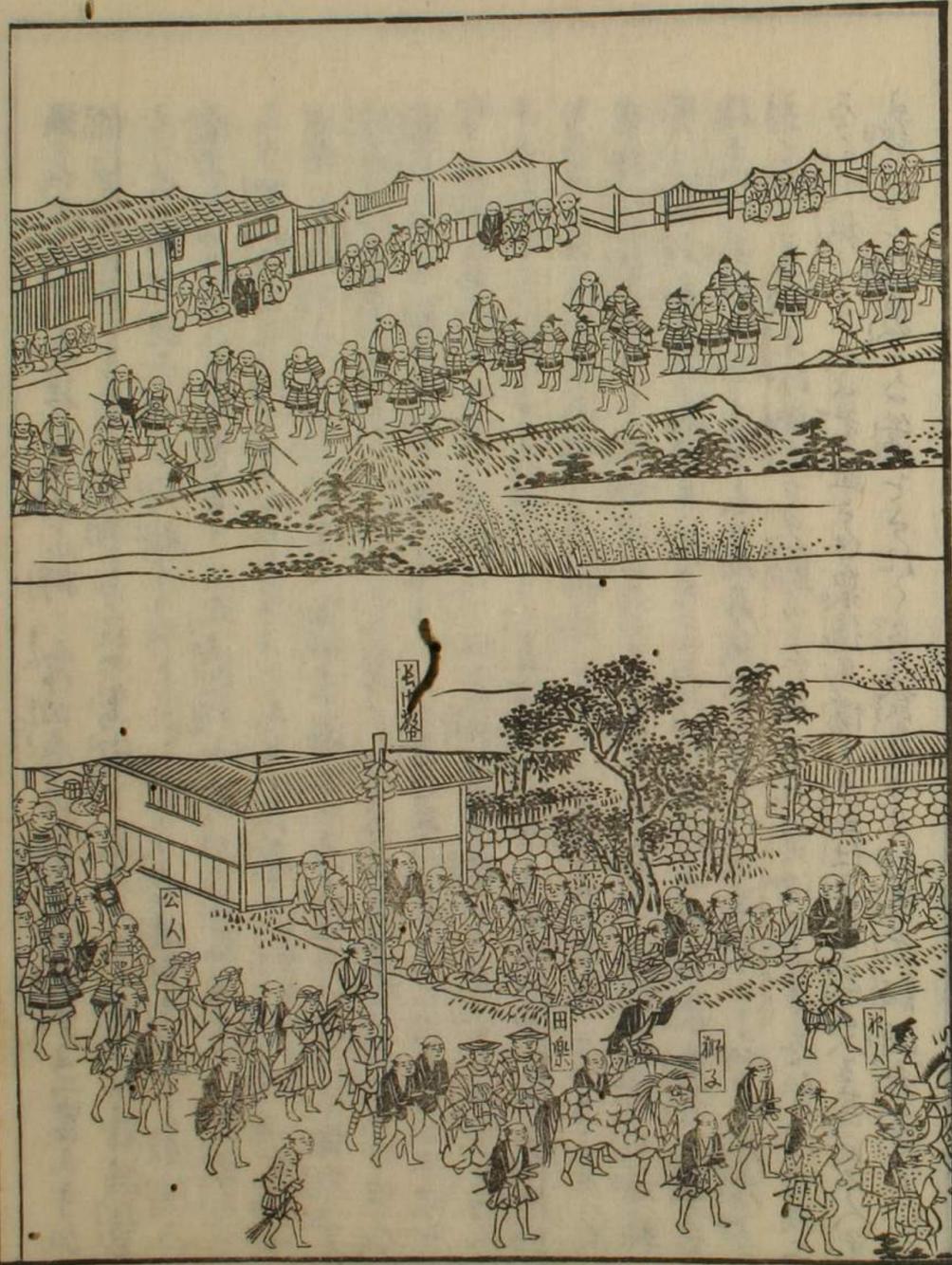
正月十八日大政所名母の後みちをより七社牛馬二通并擡十二扱けてこれを
二宮十禅師両社宮仕の内三篇各番は酒進とすべく祭礼の儀式三篇の勅あり
○三月二申の日辰刻八日寺三宮両社の神輿各儀より社拜殿へ入りてまつる
○三月廿八日の山門の内つらも大擡の五本のみちを曳くことを由り
飯室慶乃芝松まきく出りて是日月晦日早且慶道は捨て神酒を供へる儀の宮
仕祝言と此附七社の宮仕は手を擡よりて並居て神酒を頂戴と神子人夫十人
むを擡を拵各儀奉りて大宮の東の方へ入りて又七社の神子人夫も
各擡を造る○卯月初日祭礼の始りて七社の宮仕神所へ奉會と○卯月三日酉

大宮下殿より神酒を二社に供へ擡調進の宮仕祝言して皆大宮下殿
より候と今日神酒擡は二篇去りて大宮下殿に布十把擡は代より擡調進
の宮仕へより下りて先神供の用なり。同刻大津に宮より大擡神迎ひて
兼松中明神の神人お添各布衣袴馬を乗り樓門の外より馬して大宮乃
拜殿正面より大宮と宮神の宮仕大宮の階より入りて神子人夫は三篇
て人夫等松明を造りて擡を擡持して大宮の後をまゐる西の方より社の正面
日陰の内より幸の神も月より入之社を階をりて種取の下に祝言して退出
先より幸神より早尾大納言の画像をうけし先より大松明を造りし擡門より
擡出たりなりて大津に宮へ渡りし踏次の儀毎々慶慶とす。○卯月祭礼の
此の日より門より慶の宮へ一通を献じし慶の宮より奏圖の通の儀の内儀
へきり奏圖を経て女房奉書紙慶の宮より祝言代(勅許)おとす儀
の所儀者よりしは卯月丑の日山門より満方祭礼の役人粟津神所神所
與丁よりしは卯月丑の二通を送る。○次は卯の日大政所のをを奉神祇を造らし
○卯月卯日祭礼の午の日卯八王寺祭礼これに午の神子と人夫先八王寺三の宮の
神輿を両宮より早出を難不の坂をりて二宮拜殿より渡りし神言圖人此
より神子人夫をぬきしは卯月祭礼とす。○卯月祭礼を造らししは
是の一老よりしは卯月奉幣おとす。○退く此日五社の神祇奉幣とす



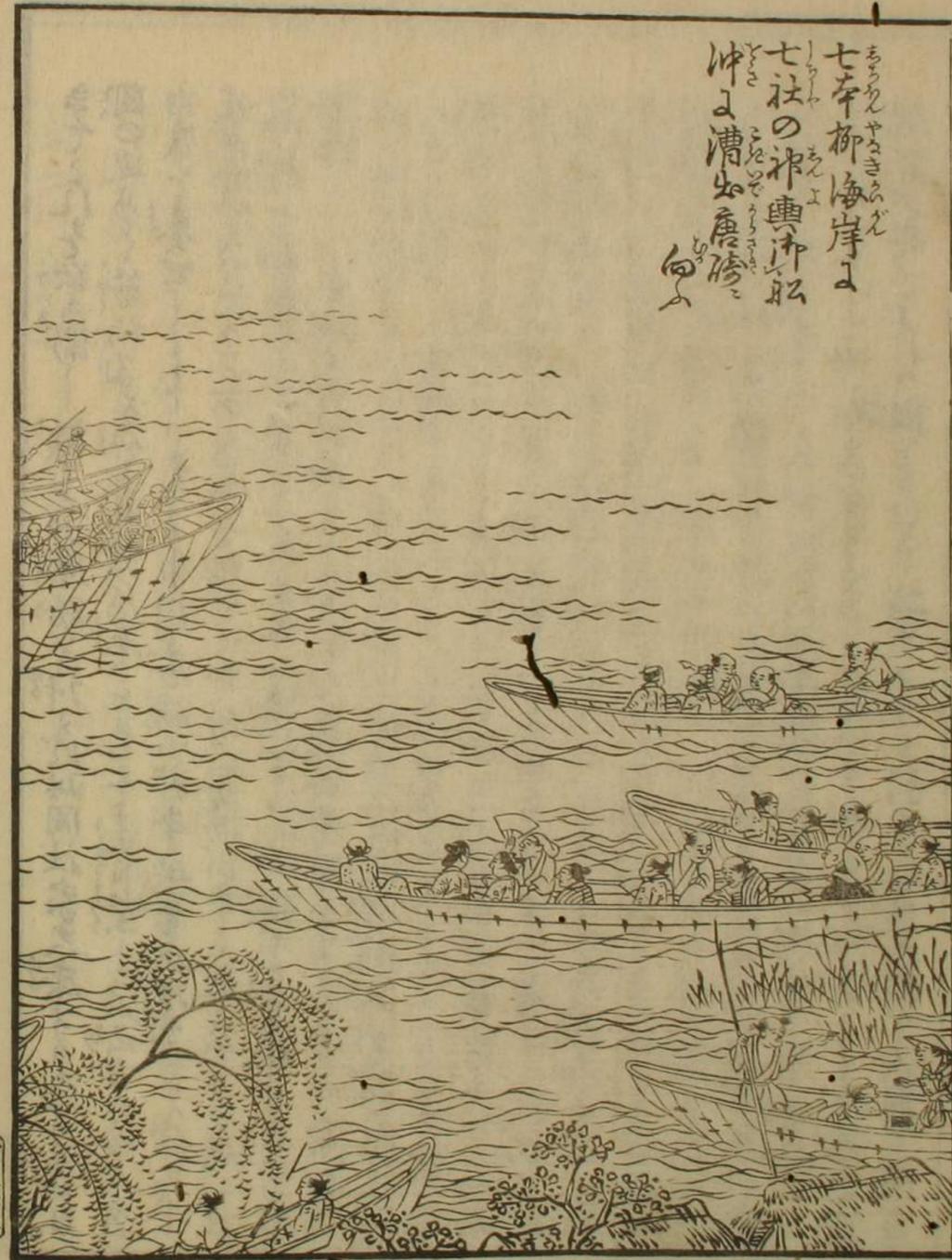
旧社の神輿
 よしや押し
 申の祭は神輿宿の
 祭に獅子舞田楽
 一社毎に勤む
 二の宮の祭
 終るをお國
 こして旧の
 神輿一時
 落し下
 てうろた
 へ其先
 ずか
 まことん
 破竹の
 おく



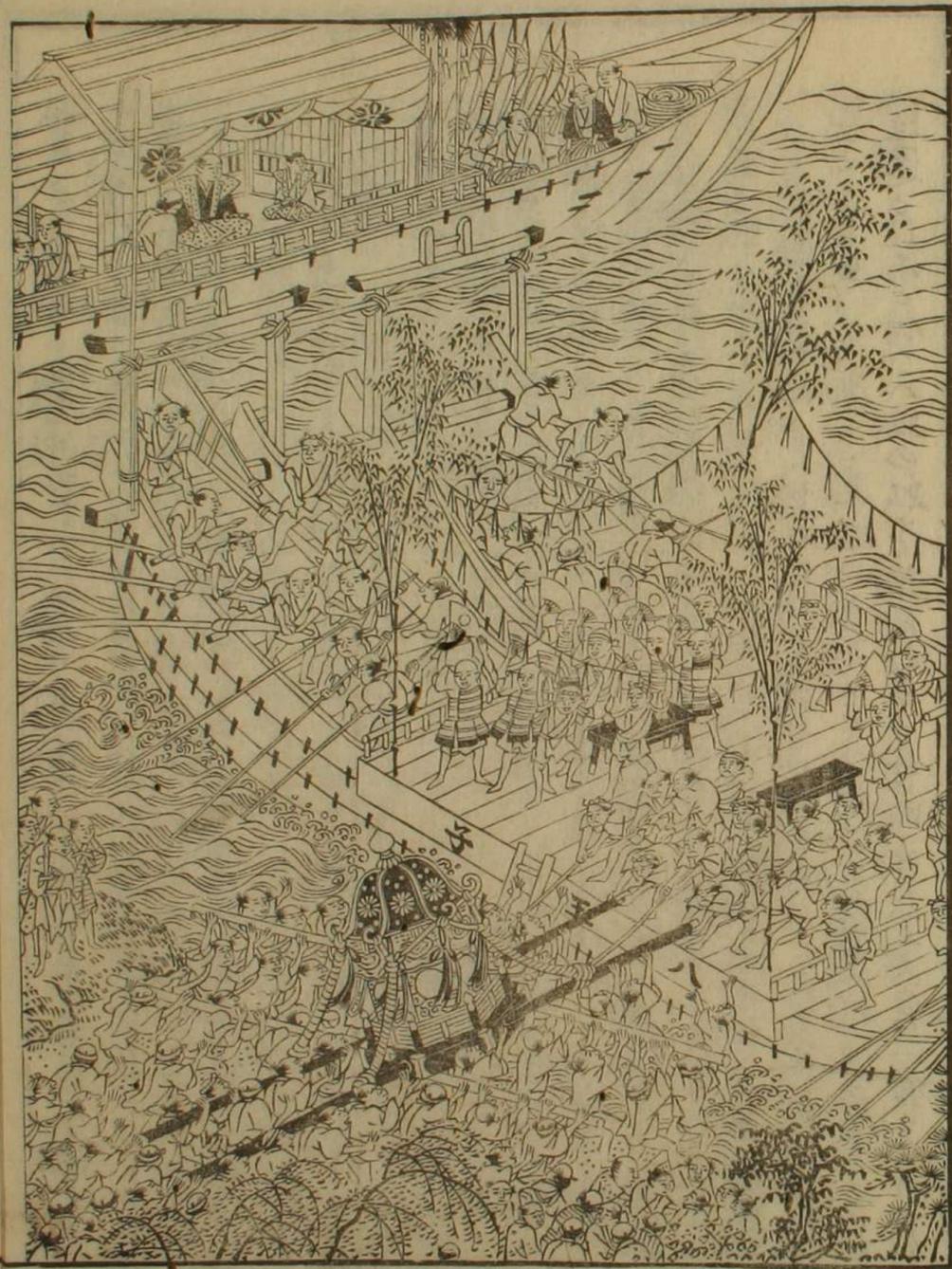


張らるるなり。毎非興の事。小獅。舞。回。樂。定。社。の。興。毎。二。宮。又。ま。い。納。り。つ。成。お。家。と。て。公。人。勝。満。く。は。社。の。駕。輿。丁。揃。ふ。う。と。唱。り。時。勝。満。意。を。こ。こ。其。府。非。興。を。一。時。二。拜。殿。より。降。し。て。か。き。出。し。各。邊。敷。き。ま。り。寸。隙。乃。遲。速。を。た。り。そ。い。嵐。の。禿。倉。より。式。法。の。列。を。定。め。二。宮。格。成。ま。り。夜。宮。乃。と。り。惣。社。の。祭。を。經。て。惣。合。の。名。舟。より。大。宮。の。拜。殿。入。り。宮。押。し。と。七。社。の。非。興。一。不。に。列。之。と。政。石。の。回。節。に。後。殿。し。て。惣。合。の。名。舟。の。下。に。押。ひ。く。挑。灯。さ。り。指。さ。る。時。大。宮。方。の。回。節。も。一。度。ま。じ。を。た。り。○。次。に。は。社。の。宝。殿。の。内。陣。に。非。供。あ。客。人。の。社。下。殿。に。こ。れ。を。供。せ。ま。り。○。二。の。申。の。日。下。坂。本。町。の。淡。々。押。ひ。く。七。社。の。非。興。の。方。船。を。揃。む。舟。二。艘。を。よ。せ。合。せ。船。深。さ。を。ら。ま。ら。其。こ。に。板。を。ま。り。板。の。よ。よ。各。務。進。行。に。本。を。ま。り。七。本。柳。の。方。舟。船。と。ま。る。○。非。馬。の。船。八。艘。日。々。此。淡。々。と。ま。り。是。浦。の。云。後。○。酉。日。申。の。日。大。宮。格。成。の。お。礼。か。り。又。知。非。供。非。宝。等。と。傳。へ。退。く。三。院。衆。徒。未。清。拜。笑。法。施。非。樂。あり。此。日。午。刻。斗。山。門。の。衆。徒。三。塔。各。集。未。和。又。集。り。て。接。衆。入。の。お。み。り。合。の。云。今。酒。多。成。た。ま。り。人。體。を。忘。れ。た。刀。と。持。た。上。り。迄。て。飲。み。三。鉢。先。冷。酒。也。と。り。一。遍。し。て。次。に。者。者。深。の。小。事。を。い。く。次。に。酒。二。る。ん。に。引。ひ。く。人。は。衆。徒。馬。場。より。出。仕。各。務。成。入。る。其。前。云。人。衆。の。警。言。圓。と。接。衆。と。る。簾。と。り。各。食。食。成。り。引。引。赤。飯。酒。肴。等。こ。れ。を。

設く。兜。の。接。衆。入。り。に。云。人。衆。と。次。み。小。事。又。一。人。眉。を。は。り。長。術。橋。と。名。し。狗。麻。紙。り。ち。法師。の。肩。の。法師。白。布。一。端。肩。より。ひ。て。の。せ。り。次。に。若。大。衆。素。給。紙。差。し。老。僧。日。々。後。の。兜。に。上。座。に。坐。り。て。三。院。互。に。酒。接。祝。言。を。い。り。其。の。食。成。り。兜。の。り。より。お。れ。を。没。く。○。未。の。刻。に。粟。津。河。供。成。り。衆。徒。の。は。と。山。門。執。事。代。二。通。接。衆。持。き。上。り。○。日。刻。衆。徒。の。宮。より。幣。使。大。宮。一。系。の。比。色。の。泡。裳。五。條。裝。束。着。て。御。幣。七。本。一。條。置。り。て。先。を。お。待。○。日。刻。社。家。二。人。衣。冠。下。寺。自。分。の。宅。より。乘。馬。は。り。政。所。の。系。を。通。り。馬。場。より。出。て。大。宮。に。乘。候。と。五。五。の。幣。七。本。宝。衣。に。着。る。社。家。の。り。出。仕。衆。徒。の。幣。七。社。の。非。興。に。接。祝。言。成。て。こ。の。大。衆。の。あり。坐。と。○。座。に。宮。の。幣。使。大。宮。の。階。を。三。三。上。り。府。宮。は。桂。の。枝。一。把。ま。り。退。て。其。日。上。京。あり。○。大。宮。御。堂。系。に。非。馬。一。疋。と。牽。て。非。興。に。各。桂。の。枝。を。在。り。○。大。津。に。宮。に。こ。れ。あり。大。排。年。の。刻。斗。上。坂。本。排。乃。宮。に。渡。河。あり。こ。れ。に。宮。松。本。平。燈。明。神。栗。津。又。石。社。の。非。人。等。供。奉。し。ま。る。若。後。き。び。く。教。言。圓。の。を。親。善。寺。町。に。あり。て。御。排。を。當。り。舊。例。と。し。て。其。石。の。派。治。橋。と。き。ぬ。を。差。し。牽。の。排。と。成。し。繩。を。打。て。こ。れ。を。冷。水。畢。つ。く。坂。下。に。ま。り。○。未。刻。宮。は。三。人。排。の。宮。に。乘。り。向。ふ。此。内。客。人。の。社。の。宮。仕。ま。り。奉。幣。祝。言。と。其。余。七。社。の。宮。仕。の。内。二。人。の。排。つ。く。排。を。大。宮。人。供。奉。と。○。未。の。下。刻。教。言。圓。の。云。人。衆。下。坂。本。比。敷。越。の。俣。者。に。禮。を。着。し。中。の。名。舟。の。下。に。

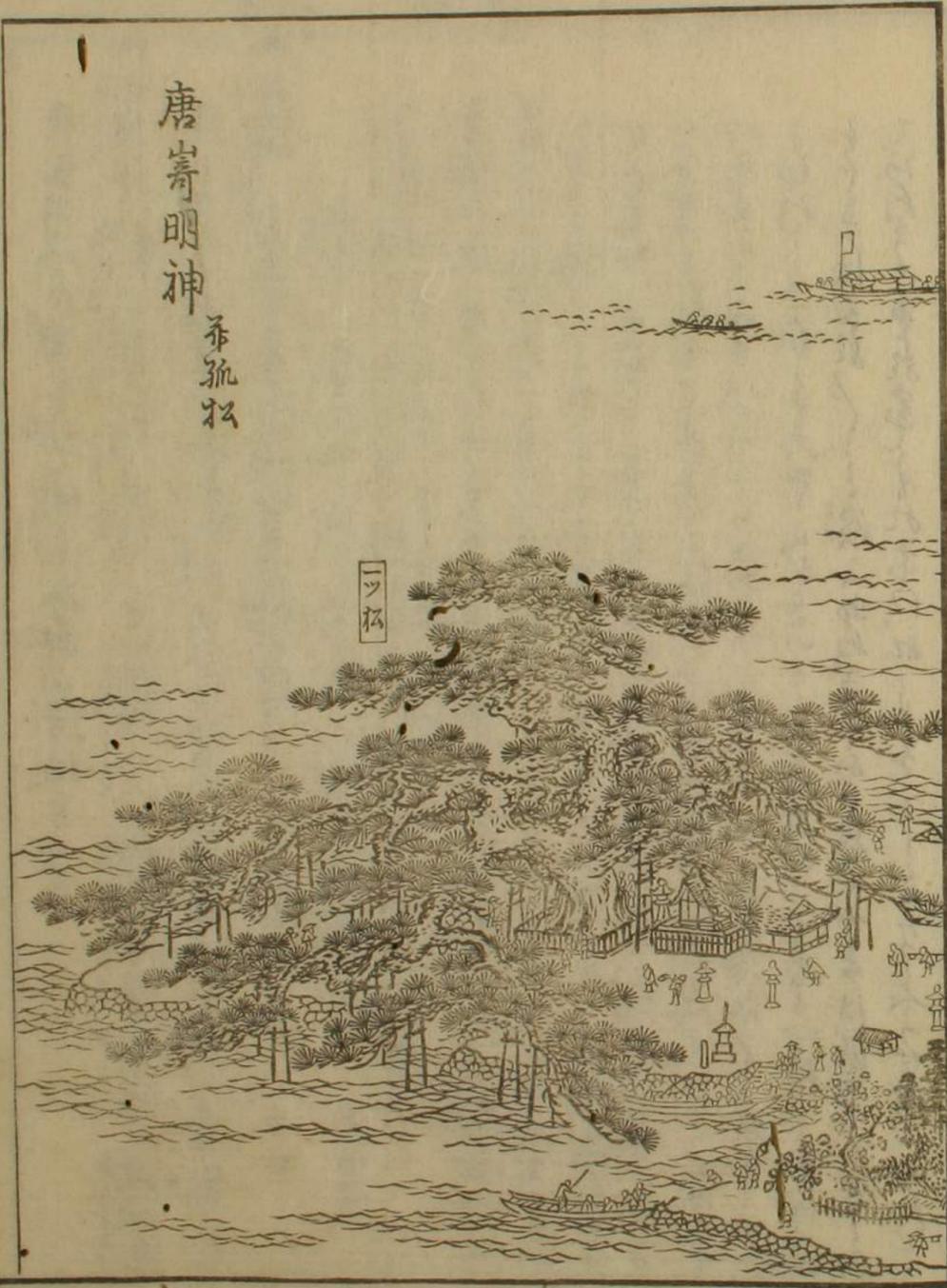


七奉柳海岸
七社の神輿沖舩
仲ノ漕出唐修
白



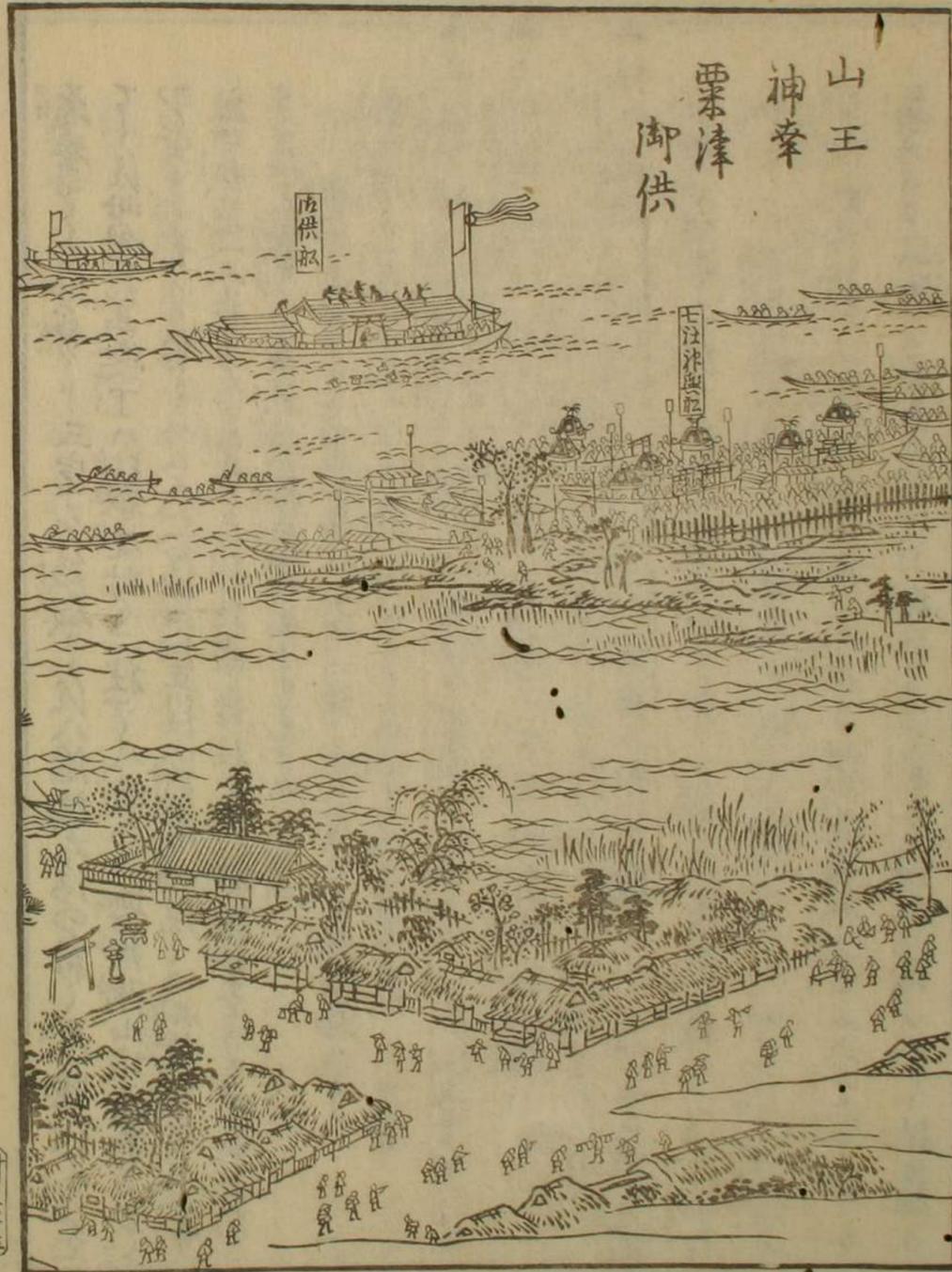
唐寄明神

希孤松



一ツ松

山王
神幸
栗津
御供



附七十五

よき松之西一比良のま根ん中

ふみこは小松が岩のまの風よりてもたひまきとありは

○揚梅瀧

小松の西の南乃と西の方れらなり

▲澄山

五三の松かどとて小松と白松明神の海辺に此同岩瀧あり

▲白松明神

比良の麓にあり此比良明神とも号す人皇に十又代聖武天皇詔ありて

▲志曰永祿

又年の早し九月十九日白松大明神社の茶の海を町斗よ石のを

▲打下里

白松と延命寺○白松別当瀧寺あり

▲大溝

城郭あり天正年中織田七玄清信澄居城とて其後分都九系亮この

▲燃を

城を揚りて代々居せらるる

▲神の

石佛あり此内二十体あり○明神より南に志賀郡小の磯郡あり

▲打下里

白松と延命寺○白松別当瀧寺あり

▲大溝

城郭あり天正年中織田七玄清信澄居城とて其後分都九系亮この

▲燃を

城を揚りて代々居せらるる

伊勢参宮名所圖會卷附録終

